

# 戦争の記憶の疑似体験

増本 泰斗



"Protection" A workshop like a participatory performance at La Chambre Blanche, Quebec, Canada, 2010.

(1)

#### ワークショップの概要

戦争を直接体験していない者たちが、戦争体験者の記憶や口述の歴史を擬似的に追体験するための実践である。記憶や語りを物理的に再現する行為を通して、「過去」を再考し、「現在」を見つめ直す試みでもある。

(2)

#### ワークショップの手順

①

戦争に関する記憶や口述の歴史をリサーチする

戦争体験者、あるいは体験を伝え聞いた人に聞き取り調査を行うのが最も手っ取り早いですが、まずは次のような取り組みから始めてみてもよい。

- 「戦争」という語から想起される出来事を、真偽を問わず書き出してみる
- 「第二次世界大戦」に限定せず、あらゆる「戦争」を対象にしてみる

②

再現方法を検討する

記憶や語りの内容を忠実に再現することにこだわらず、手に入りやすい物を使ったり、目の前にある物を何かに見立てたりするなど、柔軟に発想してよい。たとえば、ある状況を模型や寸劇によって再現してみることも一つの方法である。

③

実践する

安全には十分に配慮する。

④

省察と検証を行う

実践終了後は、参加者同士で感想を述べ合うなど、取り組みを通じて感じたことや気づいたことを言葉にしてみる。難しく感じられても、経験したことをできるかぎり言葉にしようと試みるのが大切である。

何も感じなかったり、まったく理解できなかったりする場合もあり得るが、それもまた一つの経験として言語化してみるとよい。

もちろん、時間をおいてから再度省察や検証を行ってもよいし、別の再現方法を試して比較・検討するのもよい。

いずれにせよ、再現の巧拙や取り組みの「面白さ」といった価値基準ではなく、何を言葉にでき、何を言葉にできなかったのかという問いに向き合うことが重要であると考えている。

(3)

補足

日本において「戦争を語る」といえば、その多くは「第二次世界大戦」を念頭に置いている。しかし、戦後 80 年が経過した現在、戦争体験者の高齢化に伴ってその記憶は急速に失われつつある。そのため、今日語られる戦争の多くは、当事者の記憶を何らかの形で手がかりとした——すなわち、抽象化や再編成を経た二次的な語りとなっている場合がほとんどだろう。こうした状況においては、当事者の記憶をいかに継承し、どのように記録していくのかという問題が避けがたく立ち現れる。例えば、「加害」の歴史と反省的に向き合うアーティストの実践が近年活発化していることも、そうした問題意識の表れではないかと感じている。

一方で、このワークショップを始めた動機のひとつには、失われつつある戦争の記憶を、映像・写真・絵画といった物質的な作品以外の方法で継承できないかという、私自身の個人的な問いがあった。さらに言えば、当事者の記憶が消失するのは時間の問題であり、その後に残されるのは二次的な情報にすぎない。しかしもし、非当事者が当事者の記憶を二次的な情報としてしか接することができない状況であっても、あたかも自身の経験であるかのように“新たな記憶”として刻むことができるのだとすれば、それは記憶の継承や記録のあり方に一石を投じる契機となりえるのではないか。

もちろん、この論理が飛躍を含み、アーティストの戯言にすぎないことは自覚している。それでも、このワークショップが目指しているのは、当事者の記憶を忠実に再現することでも、その精度を競うことでもない。そもそも記憶そのものが常に不確かさを内包しているからだ。むしろ、その不確かさを抱えたまま手探りで再現してみるからこそ、当事者の原風景と同じかどうかを正確に判別できないからこそ、駆動する思考があり、獲得しうる視点が存在する。実際、これまでのワークショップを通じて、私自身さまざまな気づきや発見を得ることができた。戦争の記憶から災害の経験へと視点がリンクしたこともあった。それは、このワークショップでなければ生まれ得なかったものである。

結果論ではあるが、このワークショップの可能性はそこにある。ぜひ、何かしら取り組んでみてほしい。